第３章　発掘調査の成果

第１節　遺跡の立地と層序

南原千軒遺跡は、琴浦町（旧赤碕町）光地内に所在する。遺跡名は、調査地付近が地元で「南原千軒」と呼ばれてきたことに由来する。調査地が位置する小字名は大加布毛および壱本松であるが、調査地の北・西側に「東南原」「西南原」、南側に「南原口」の小字名が残っており（第５図）、かつては調査地周辺が「南原」と呼ばれていたことが窺える。また、「千軒」は、著名な「草戸千軒」遺跡（広島県福山市）などで知られているように、中世においては大集落を指す語であり、調査にあたって中世の遺構・遺物の出土が予想された[註1)]。

調査地が立地する地形は、勝田川と黒川によって形成された扇状地である。勝田川は調査地１区のすぐ東側を、黒川は調査地の約**400**m西方をともに北流している。勝田川の河床は周囲の水田面よりも５～６m低く、１区の東側は崖状を呈している。勝田川をはさんで東側の対岸には八幡遺跡が位置する。

調査地は標高約**26**mで、傾斜はなくほぼ平坦である。調査前の地目は畑地である。

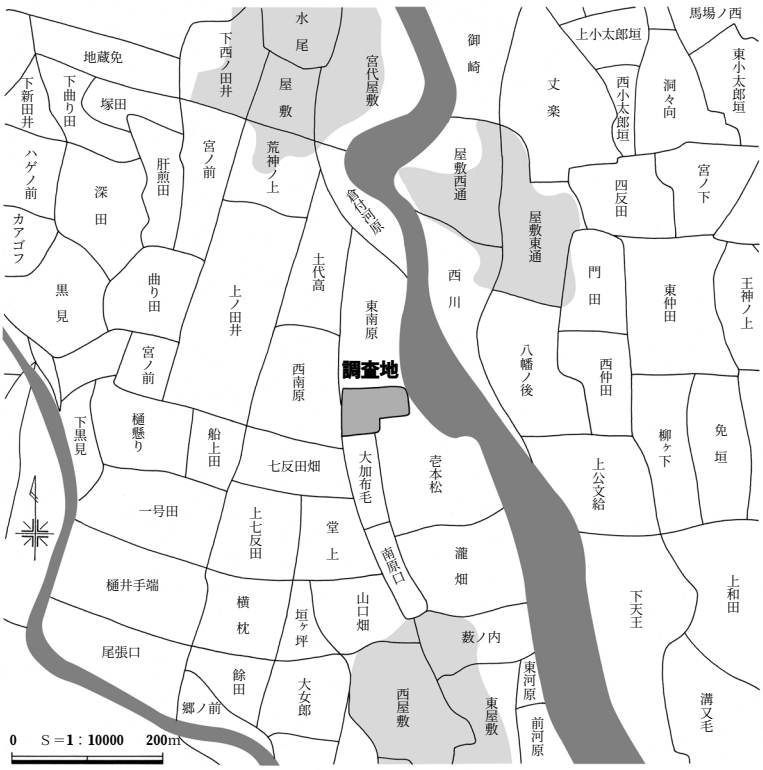
調査に先立ち、調査区北壁際および南壁付近に試掘坑を設け、断面の土層を観察した。このうち、北壁断面における所見を基にⅠ～Ⅵ層に分層した。南壁付近の堆積は、色調や混入物等が北壁際と異なる様相を示すが、層序の対応関係を優先させて北壁際に準じる層名を付した。

遺構確認面となったのはⅢ層の上面である。なお、旧赤碕町が行った試掘調査では、Ⅵ層上面に相当する面において「多数の礫が埋め込められるように出土」した「土坑」が検出された[註2)]。したがってこの面が２面目の遺構面となることが予想されたため、試掘第５トレンチを再掘して検討した結果、埋められたように見えた礫とは、Ⅵ層直下の礫層が部分的にⅥ層上面に現れたものであることが判明した。また、Ⅲ～Ⅴ層には遺物の包含は認められなかったことから、全面１面のみの調査を行うこととなった。

以下、各層序を説明する。

Ⅰ層：表土・耕土層。調査区の全面にわたって、約**20**㎝の厚さで堆積している。縄文時代から近現代までの遺物を多量に包含する。

Ⅱ層：Ⅰ層とⅢ層（遺構面）との間に堆積した遺物包含層をⅡ層として一括した。調査区内に広く堆積するのはⅡ－１層（暗灰褐色土）で、厚さ約**15**～**20**㎝である。縄文時代から近世



第５図　調査区周辺の小字名（■…現在の集落）

までの遺物を包含する。Ⅱ－１層の他に、調査区北壁にみられるⅡ－２、３層など、局所的な堆積も認められた。これらは色調が似通っており、断面観察では分層できたがその広がりを面的に把握することは困難であった。また、調査区の各所で、耕作に伴う撹乱がⅡ層からⅢ層にまで及んでおり、これら撹乱土、包含層、遺構埋土の識別にも困難を伴った。

また、調査区の西側、おおむね８グリッドライン以西では、厚さが最大で約**20**㎝におよぶ暗赤褐色の鉄分沈着層が部分的に堆積していた（Ⅱ－５層）。この層は弥生時代～７世紀代の遺物（須恵器を含む）を包含しており、７世紀代に埋没した**SD**９の埋土上面を覆っている。さらに、９世紀代に埋没した**SD**１がこの層の上面から掘り込まれている。したがって、この層の形成時期はおよそ８世紀代と考えられ、当該期に調査区西側が滞水環境にあったことが窺える。

Ⅲ層：黒褐色～暗灰褐色を基調とするシルト質の堆積であり、この層の上面が遺構面となる。概して調査区の西側では黒味が強く、東側および南側ではより明るい色調であるが、その変異は漸移的である。なお、１区においては表土下が黄褐色砂質土層となっており、遺構・遺物が確認されなかった。層序としてはⅢ－３層ないしⅣ層以下に対応するものと考えられ、遺構面がすでに削平され失われたものと判断した。

Ⅳ層：しまりの強い黒褐色のシルト層。南側ではやや明るみを帯び、拳大～人頭大の礫を多量に含む（Ⅳ’層）。

Ⅴ層：暗褐色のシルト層。南側ではやや暗い（Ⅴ’層）。

Ⅵ層：黄灰色の砂層。調査区の北側、南側、西側（試掘第５トレンチ）で共通して認められる。

地表面からⅥ層上面までの深さは約**1.2**～**1.5**mである。Ⅵ層の下位は、先述した試掘第５トレンチでの所見によれば礫層となる。表面観察による限り、シルトや粘土を含まず拳大の黄灰色礫のみで構成されており、勝田川の旧河床である可能性が高い。なお、今回の調査地の**60**m南で行われた**1996**年の調査では、「基盤層までは約**60**～**140**㎝であり、旧河床のものと考えられる大レキが混入していた」、遺物は「耕作土下よりは全く出土しなかった」と報告されている[註3)]。

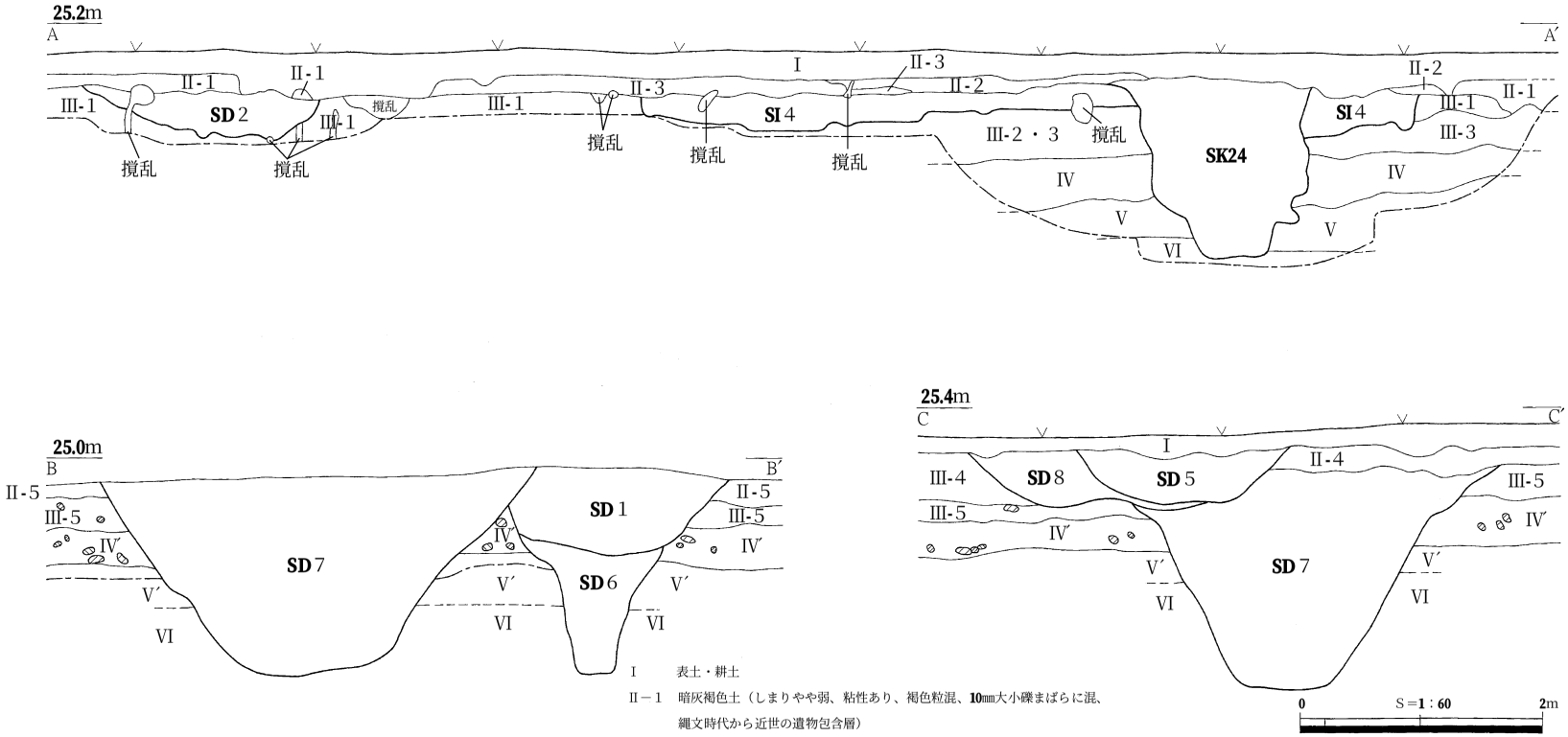
以上のように、勝田川の氾濫原に位置する本調査区の基本層序は、シルトや礫を主体とした不安定な堆積を示している。本調査区が人々の生活の舞台となって以後も、縄文時代と中世の遺構が同一遺構面で検出されたことなどから、生活面の形成と流失が繰り返されたことが窺われる。鉄分沈着層やⅡ層として一括した局所的な堆積が処々に認められる点と合わせて、本調査地が勝田川の影響を受け続けたことが推測される。（君嶋）

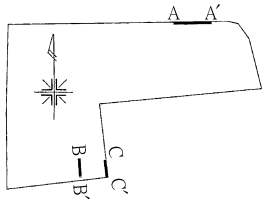
【註】

（１）当地が「千軒」と呼ばれた由来については、遺跡周辺の方々からいくつかの説を伺うことができた。
①明治年間、付近は朝鮮人参（もしくはダイコン）作りが盛んであり、作業小屋が林立してあたかも集落のようであった。
②当地は湯坂集落と光集落の中間に位置するが、両集落間の距離が「千間」であり、「千軒」は当て字。
③光集落はかつて調査地付近にあったが、ある時大火に遭い現在の地に移った。

（２）小泉傑・石賀太編　**2004**　『赤碕町内遺跡発掘調査報告書Ⅸ』赤碕町埋蔵文化財調査報告書第**15**集、赤碕町教育委員会

（３）大谷浩史編　**1997**　『赤碕町内遺跡発掘調査報告書Ⅵ』赤碕町文化財調査報告書第**10**集、赤碕町教育委員会





土層断面図位置図

I　表土・耕土

II－１　暗灰褐色土（しまりやや弱、粘性あり、褐色粒混、10㎜大小礫まばらに混、縄文時代から近世の遺物包含層）

II－２　暗灰褐色土（しまり強、黒褐色粒斑に混、３㎜大黄褐色砂礫（黄色粒）多混、包含層）

II－３　暗灰褐色土（II-２層に色調似るが灰色強く暗い、しまり強、緻密、白色微細粒・橙色粒［スコリアか］ごく少量混、炭化物混、中世初頭の遺物包含層）

II－４　褐色土

II－５　鉄分沈着層（７世紀代までの遺物混）

III－１　暗灰褐色シルト（黄褐色砂礫混）

III－２　黒褐色土（しまり強、粘性弱（シルト質）、白色微細粒、5㎜大黄褐色砂礫まばらに混、地山）

III－３　暗灰褐色シルト（白色微細粒混）

III－４　褐色土

III－５　暗褐色土

IV　黒褐色シルト（しまり強、白色微細粒混）

IV'　暗褐色砂礫層

V　暗褐色シルト（しまり強、白色微細粒混）

V'　黒褐色シルト

VI　黄灰色砂層（V層との境は漸移する）

第６図　調査区内土層断面図

第２節　縄文時代の調査成果

（1）概要

縄文時代の遺構として、後期初頭（中津式期）の竪穴住居跡１軒（**SI**５）を検出した。

遺物は、**SI**５の他に遺構外からも出土している。土器は中津式が最も多く、前期の爪形文土器、後期前葉～中葉、後期中葉～後葉の土器が少量存在する。注目されるのは、表土中から出土した土偶の脚部片である。土偶としては県内６例目の発見であり、形態的な特徴に東日本の影響が認められる。

※遺構外出土の土器、土偶の実測図は、第７節の第**86**図（**68**ｐ）に掲載している。

（2）竪穴住居跡

SI５（第７・８・９図、第１表、PL.５・22・40・44）

調査区の北東、**B4**グリッドに位置する。耕作に伴う撹乱が著しく及んでおり遺存状態はよくないが、長軸**5.25**m、短軸約**3.6**mの楕円形を呈し、主軸をやや北西－南東方向にとる。検出面から床面までの深さは５～８㎝と極めて浅い。したがって壁面はほとんど遺存していないが、その立ち上がりは垂直とはならず、全体として浅い皿状の掘り込みである。住居の中央やや西寄りには石囲炉が構築されている。

床面は、住居の西側、すなわち**P1**と**P7**の間、および石囲炉の東側、中央やや東寄りの３箇所で、硬化した貼床を検出した。このうち石囲炉の東側では、貼床が上下２面に重複していた。これらの貼床が部分的に施されていたものか、本来は床面全体に貼られていたものかは不明であるが、貼床部分以外では地山であるⅢ層（黒褐色土）の上面をそのまま床面としており、特に硬化した範囲は認められない。また、床面上では３箇所の焼土面を検出した。これらのうち**P1**の南西側に接する焼土面は非常に硬く焼き締まっていた。残る２箇所は、明るい色調の焼土が床面上に薄く散った状況である。その他に、ピット**13**基、直線状または弧状の溝数条を検出した。これらの埋土は床面（地山）と似通っており、締まりの強弱や炭化物の混入などを手がかりとして検出した。これらのピットには柱痕跡の明らかなものはなく、また配置も不規則であり、主柱配置を復元するには至らなかった。溝は幅**10**～**20**㎝、深さ５㎝程度で、住居の東側に集中している。住居の縁に沿った壁溝状のものもあるが、概して走向は一定せず、性格は不明である。

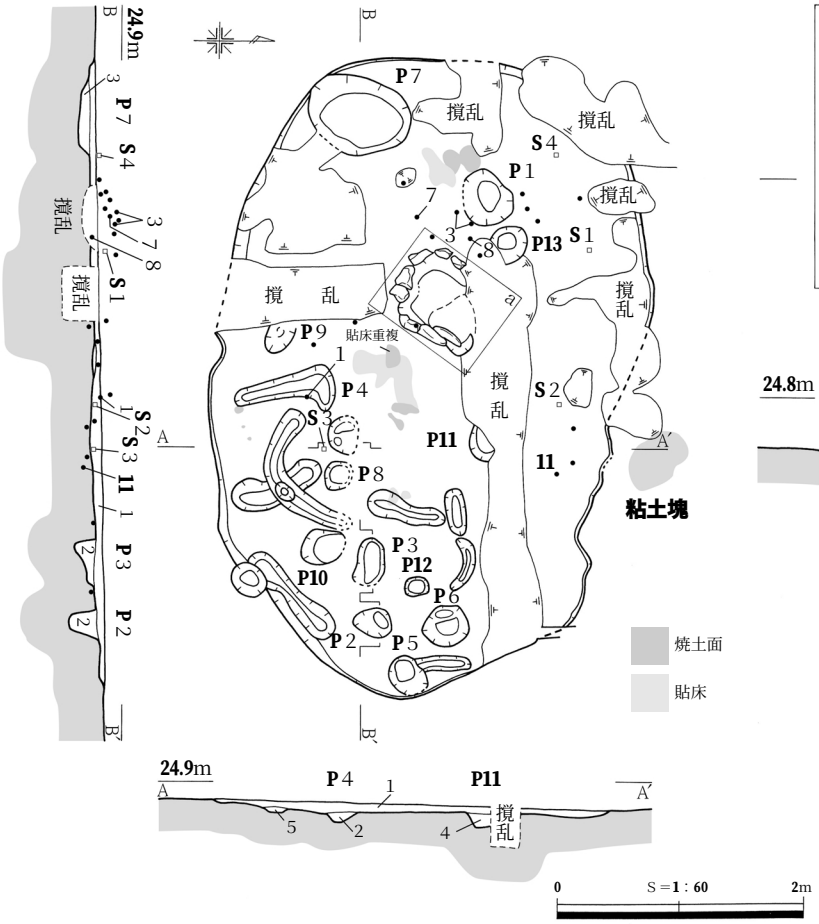
第１表　SI５ピット計測表

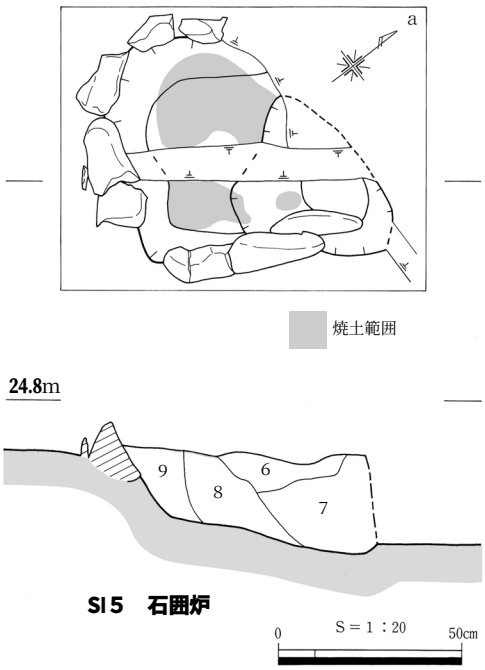
No.	長径(㎝)	短軸(㎝)	深さ(㎝)	埋　土
P1	46	38	19	暗灰褐色土
P2	30	23	24	２層
P3	40	22	17	２層
P4	31	24	7	２層
P5	32	30	13	暗褐色土
P6	38	34	8	暗灰褐色土
P7	87	62	8	３層
P8	26	22	7	暗灰褐色土
P9	△28	22	13	暗灰褐色土
P10	39	30	6	暗灰褐色土
P11	△24	△22	13	暗灰褐色土
P12	19	14	－	暗褐色土
P13	△26	29	23	灰褐色土

△は残存値

石囲炉は北側を撹乱によって破壊されているが、主軸を北東－南西方向にとる方形ないし長方形を呈するものと考えられる。残存長は**80**㎝、幅は**74**㎝である。炉底は北側へ向けて傾斜しており、深さは最大で**24**㎝である。炉内埋土の検出面上に薄く焼土が広がっていたほかに、埋土の８層中にも焼土がブロック状に混入していた。ただし、灰や炭化物は顕著には認められなかった。その他、炉内埋土中には割れた礫が数点含まれていた。

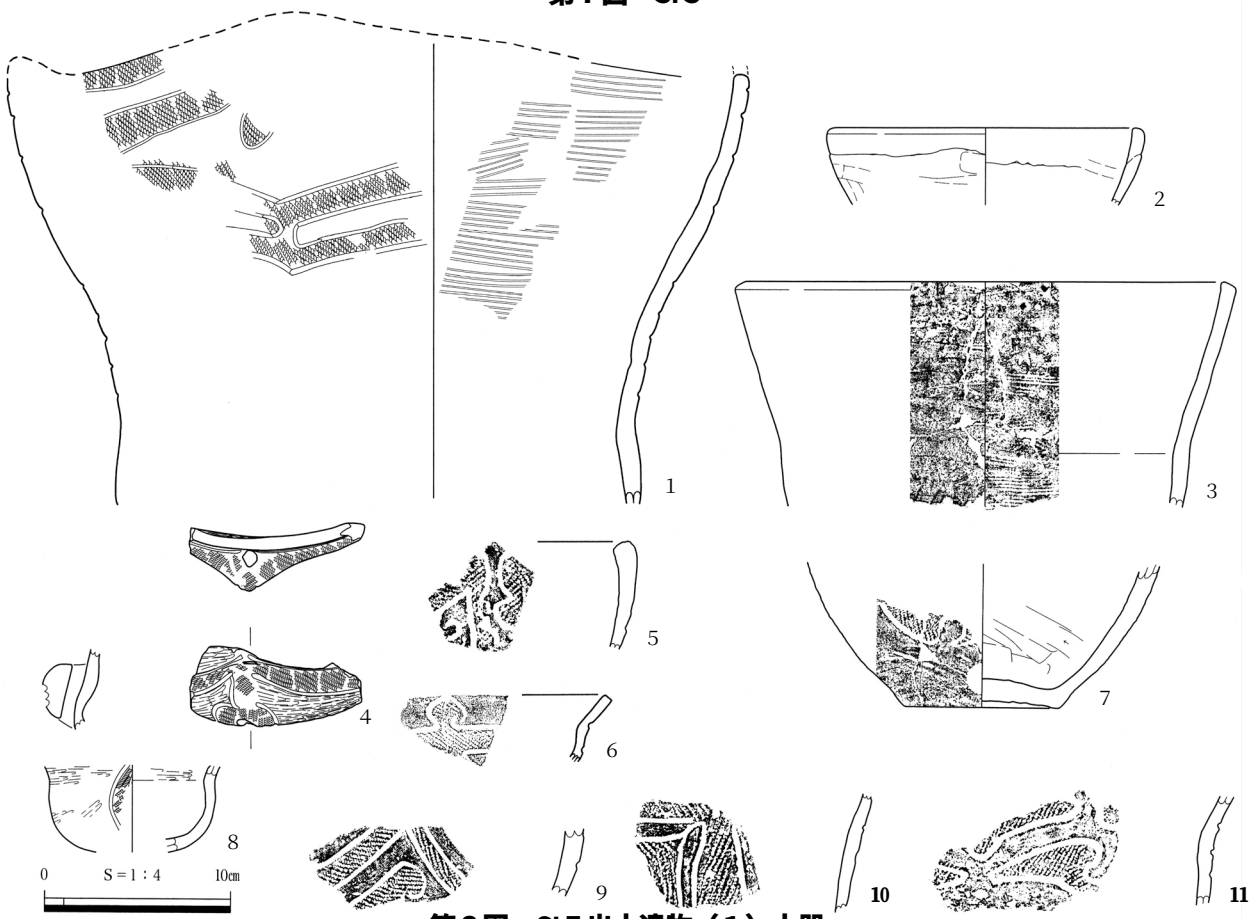
さて、ここまで本遺構を１軒の住居跡として記述してきたが、長軸が約５ｍあり当該期の住居跡としては大型



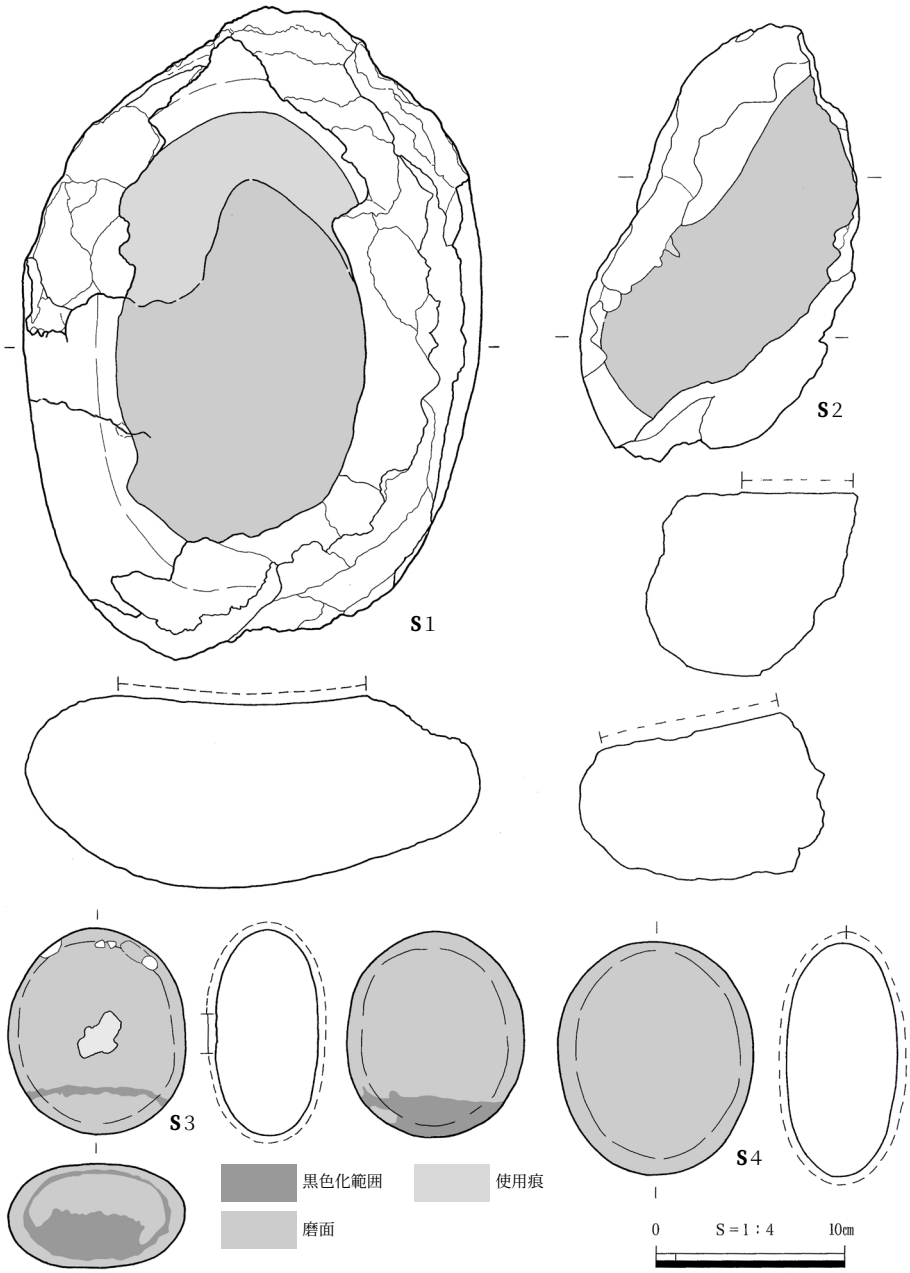


1　暗灰褐色土(しまり強、白色微砂粒わずかに混)
2　灰褐色土
3　暗灰褐色土(炭化物微量混)
4　暗灰褐色土
5　暗褐色土
6　暗褐色土(焼土粒混、炭化物微量混)
7　黒褐色土(白色微砂粒・炭化物微量混、地山土に類似)
8　暗褐色土(ブロック状の焼土多く混、炭化物微量混)
9　黒褐色土(しまり強)

第７図　SI５



第８図　SI５出土遺物（１）土器



第９図　SI５出土遺物（２）石器

である点、石囲炉の他に複数の火処（焼土面）が存在する点、ピットや溝が密に集中しており、溝の切り合いもみられる点、溝の埋土上に貼床が遺存している点、貼床が２面重複している点などから、建て替えあるいは拡張によって複数の住居が重複している可能性が高い。ただし、住居全体の埋土があまり残っていないため、土層断面での切り合い関係は把握できなかった。

本住居跡からは、縄文土器片多数と礫石器数点が出土した。土器片は１、３のように遺存度の高い個体もあるが、完形に復元できるものはない。床面直上から出土したものは２、６、８、**10**である。礫石器のうち、石皿**S1**、磨石**S4**は底面からやや浮いた状態で、石皿の破片**S2**、磨石**S3**は床面直上から出土した。また、床面上ではこれらの遺物の他に、拳大程度までの自然礫や割れた礫が数点検出され、その中には被熱したものも１点認められた。

粗製深鉢３、精製深鉢底部７は、厳密には住居跡の埋土よりさらに上層の包含層から出土したものである。本住居跡を検出する以前の、表土・包含層を掘り下げる段階においても、本住居跡付近では周辺に比べて特に縄文土器が集中して出土した。３、７も含めたこれらは、本来はこの住居跡の埋土中に存在したものが撹乱によって浮き上がったものと考えられる。またこのことと関連して、住居の掘り込み面が本来はもう少し高かった可能性も考えられる。

本住居跡から出土した土器は、そのほとんどが縄文時代後期初頭、中津式の段階に位置づけられる。したがって、建て替えないし拡張を含めた本住居跡の時期は中津式期と考えておきたい。　（君嶋）

付・粘土塊

SI５の北縁に近接して、長軸約**55**㎝、短軸約**40**㎝、厚さ約**20**㎝の灰白色粘土塊を検出した。住居内に保管された土器素材である可能性が想起されたが、断ち割って調査したところ、粘土内から黒曜石製の石鏃破片の他に、弥生土器もしくは土師器の破片が出土したため、**SI**５に伴うものではないことが判明した。土器は細片であり時期は特定できない。性格も不明である。（君嶋）

第３節　弥生時代の調査成果

（1）概要

弥生時代の遺構として、溝２条（**SD**２・３）、土坑４基（**SK**４・**16**・**20**・**23**）を検出した。

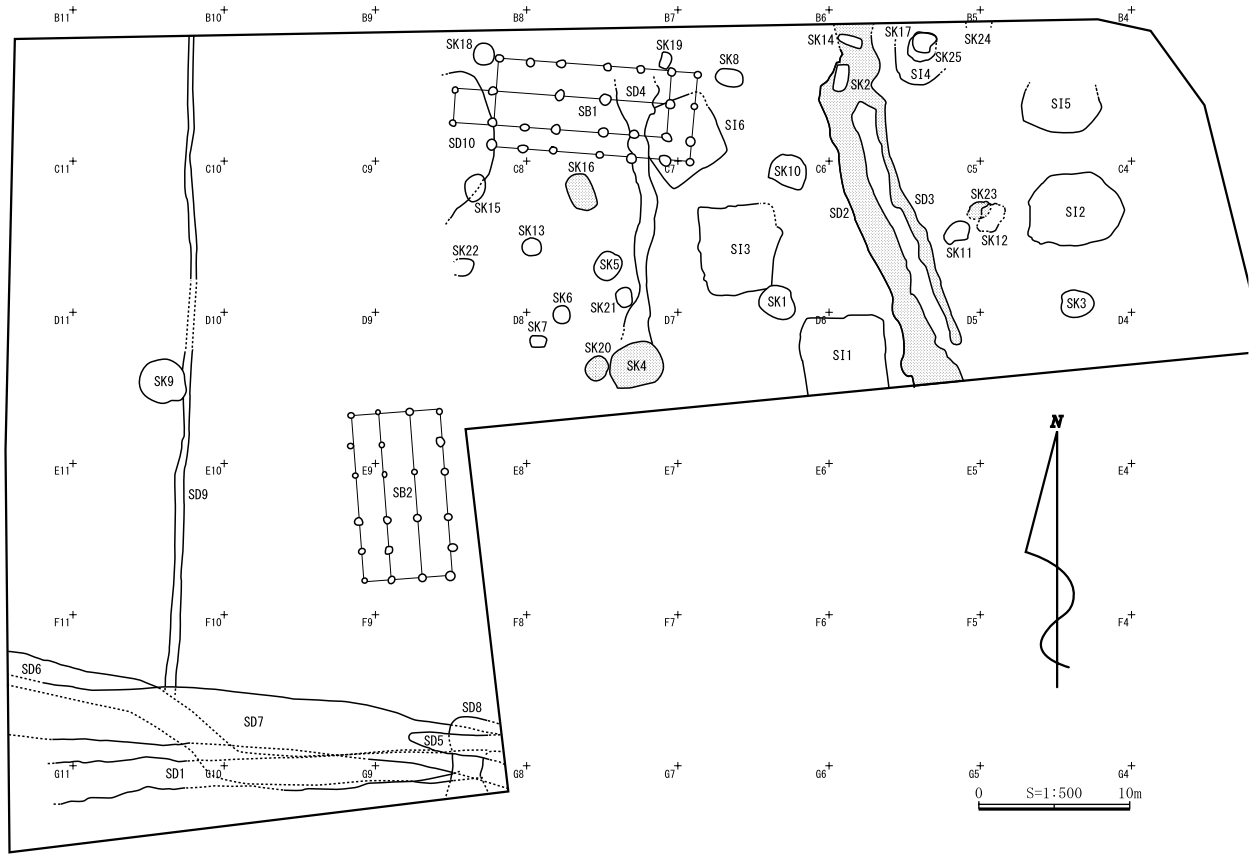
SD２・３は自然流路と考えられ、縄文時代から弥生時代終末期までの多量の土器を含む。また、碧玉製の管玉未成品も出土している。

４基の土坑はいずれも中期の遺構である。**SK**４、**SK16**では礫とともに土器が廃棄された状況を示す。**SK20**からは石鋸が出土しており、**SD**２・３の管玉未成品と合わせて、本遺跡で弥生時代中期前葉～中葉に玉作が行われていたことが推測される。（君嶋）

（2）溝

SD２・３（第11・12・13図、PL.６・23・42・44）

調査区の東側、**B5**・**C5**・**D5**グリッドに位置する。両遺構は南北方向に平行する２条の溝であり、**B5**グリッドで合流する。両遺構の先後関係は、面的に検出した段階で把握した切り合い関係から、



第10図　弥生時代遺構分布図